高等研究院「第1回スーパーレクチャー」が開催される

高等研究院「第1回スーパーレクチャー」が、9月8日（木）野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて、本学の教職員・学生・一般市民など、約180名の参加を得て開催されました。

このレクチャーは、世界最高水準の研究者を招聘しての講演（招待レクチャー）と高等研究院での採択研究プロジェクトが終了した流動教員による研究成果の発表（高等研究院レクチャー）の2部で構成され、国際的に最先端をゆく学術活動の一端を広く社会に伝えることを目的として、本年度初めて開催されました。

レクチャーでは、北住炯一高等研究院長の趣旨説明、山本進一理事（研究・国際交流担当）による挨拶の後、田上英一郎高等研究院副院長を司会として、招待レクチャーでは、かつて名古屋大学に関係され、素粒子研究の分野でノーベル賞級との評価を受けている益川敏英氏（京都大学名誉教授）の「真理へのアプローチ、媒介項は何か」と題した講演がおこなわれました。益川氏は、科学研究における画期的飛躍が何によってもたらされたかを、おもにご専門の素粒子物理学分野を事例に、ユーモアあふれるエピソードを交えながら、研究者にとって他者と「議論すること」の重要性など、多くの示唆に富む内容をお話しされました。

また、高等研究院レクチャーでは、岡田猛氏（教育発達科学研究科・教授）の「芸術家の創作過程」、家森信善氏（経済学研究科・教授）の「東海地域の金融システムの特徴と課題：名古屋の金利はなぜ低い？」、有本博一氏（元理学研究科、現東北大学・教授）の「多剤耐性菌と闘う」、楠見明弘氏（元理学研究科、現京都大学・教授）の「細胞中の一分子を見る、触る」、そして丹羽 公雄氏（理学研究科・教授）の「顕微鏡でニュートリノの種類を見分ける」の5つの報告がなされ、高等研究院での研究成果が披露されました。

これらのレクチャーに引き続いての懇親会では、講師の方々に加えて、さまざまな分野の研究者など学内外の方々が参加され、専門分野を超えての活発な議論がなされていました。

なお、今後も高等研究院では、研究成果を広く学内外に発信するため、流動教員を中心とした講師陣による、特定の研究テーマに主眼を置いた高等研究院フォーラムを11月25日（金）に「アジアの共通理解と総合的支援体制」と題し、開催する予定です。